

第1回 運営委員会

日時 令和元年6月5日(水) 13:00～14:15

場所 市庁舎8階 教育委員会室

<出席者>

嶋 崎 隆 則 教育長	中 野 雅 弘 学校教育部長	
村 松 正 仁 学校指導担当部長	山 下 修 弘 企画調整監	
大 島 健 委員長	瀧 川 秀 敏 副委員長	
市之川 敦 子 委員	加 藤 瑞 希 委員	古 村 俊 大 委員
塩 田 直 之 委員	田 中 理 恵 委員	春 山 俊 裕 委員
藤 崎 博 人 委員	松 本 浩 子 委員	
多治見 忠 指導主事	傳法谷 肇 指導主事	
久 永 恵 子 調査研究専門指導員	本 郷 美 香 事務員	

※委嘱状交付

- 1 嶋崎教育長挨拶
- 2 委員自己紹介
- 3 運営委員長及び副委員長の選出・挨拶
- 4 議事
 - (1) 平成30年度事業報告
 - (2) 令和元年度運営方針
 - (3) 令和元年度研究事業
 - (4) その他
- 5 質問・意見交流
- 6 閉会

《質問・意見交流より》

- 改めて、学校教育のために尽力している教育研究所だと感じた。
- 学校に携帯電話を持ちこめるようになるとニュース等で見聞きするが、そこから派生するいじめ等が心配である。
- 夏の教職員向け研修において生徒指導（いじめ）に関する講座を実施し、学校における問題行動等に係る取組の充実につなげていく
- ただ、携帯電話（スマートフォン）は正しく使えば学習時に大変便利なものである。
- 市民劇場の代表もしているので、出前講座を学校現場でたくさん活用してもらい、子どもたちにとって思い出に残るものを提供していきたい。
- 教育研究所は、一年間で多面的・総合的な研究がされており、大変素晴らしい
- 教職員の資質能力を高めることが、教育の質を高めることに直結するので、今後も魅力ある研修講座を開催してほしい。
- 登下校時に児童が犠牲になる事件が多いが、その後の心のケアが必要であると考えている。
- 小学校における教科担任制の検討は進んでいるのか。
- 検討に入る段階だが、市内でもいくつかの学校で教科担任制に近い形で学年間で協力し授業をしている学校がある。
- デジタル教科書については、今後の活用の見通しはあるのか。
- 有償であるため、今すぐに活用できるものではないと考えている。しかし、次年度から使用する新しい教科書には QR コードで読み込めるデジタル教材が無償でついていると伺っているので、その効果をしっかり見極めていきたい。
- 教職員は研修の機会が非常に多く、先生方はたくさん勉強していると感じた。
- 自身の経験からだが、今の若年層は漢字の読み書きが苦手な方が多いと感じる。難しい漢字が書けなくても、今はワープロで入力・変換して仕事ができる時代だが、そもそも変換する漢字を読めず入力できない方を多く見る。
- これから働き手となる子どもたちが将来、職業選択で困らないように、教育研究所の研究等を通して、学校教育をバックアップして行ってほしい。
- 長期休業中の研修講座について、参加者が多くいるが、二次募集をしなくても参加希望者が集まるといふ、市内教職員の研修参加への意欲と、教育研究所の講座の工夫が素晴らしいと思った。
- 中学校現場では部活等もあり、長期休業中に余裕をもって参加することは難しい一面もあるが、教職員が参加できるよう、配慮していきたい。
- 教育研究所としては「研究」「研修」「相談」の3つの柱があり、その全てについて素晴らしい取組をしていると感じた。
- 「研究」では外国語グループ作成の Can-Do リストが大変良く、学校現場でしっかり使っていきたいと感じた。
- 「研修」については、夏と冬の長期休業中研修講座の果たす役割が大変大きい。十勝管内の教職員の平均年齢が 45～46 歳であるが、一説には数年後に 10 年ほど若返ると聞いている。今現在 20～30 代の教職員をしっかり鍛え、仕事ぶりを背中で語ることができるようなミドルリーダー的な教職員の育成は喫緊の課題である。
- 各種研修についてアンケートを取り、数値によるデータを残していることも素晴らしい。その内容について確認し、講座開設の一助となるよう助言していきたい。
- 教育研究所業務の 1 つである授業改善等サポート研修（サポ研）の取組は大変すばらしく、本校でも若手教職員の育成を担っている。
- 外国語科の Can-Do リストについては、新しい研究領域について、市内で統一した評価規準のもとで授業を進めることができ、大変参考になる。
- 教育研究所運営のために学校にできることがあれば、一主幹教諭として、これからも協力していきたい。

- 教育研究所が多岐に渡る研究を行い、成果物を発刊していることを改めて感じた。
- その取組はしっかり学校には届いていると思うが、それが確実に教室、児童生徒まで届いているかという視点で見つめなおしたい。
- 小・中学校での校種差もあると思うが、研究成果をしっかりと児童生徒のもとまで届けることについて、中学校長会を代表して参加している研究所運営委員として、自分に何ができるかを再度考えていきたい。
- 今時期の中学校現場は修学旅行・体育祭等大変忙しい。
- 研究所発刊物にも「働き方改革」の記事があるが、働き方改革には本腰を入れて取り組む時期が来ていると感じる。
- 教職員には研修したい気持ちがあるが、物理的に時間がとれない場合も多々あるのが日常であるため、時間をどうやりくりして無駄にしないかということは、常に現場での課題となっている。
- 学校における「働き方改革」をしっかり推進していくためにも、教育研究所には期待している。
- 教育研究所の素晴らしい取組について理解したが、この良さは直接保護者の元にはまだまだ届いていないと感じる。
- 研究内容の中では、やはりこの後完全実施される、外国語の研究に一番興味をもった。
- 早い時期から学習を始めることで、英語嫌いの児童が少なくなり、市内の外国語教育が一層充実するように強い期待をしている。